

2023年7月1日



題名：教室のみんなが好きなもの

◆作品解説◆

スマートキッズプラス港南では、中学生が中心となり、みんなが好きな物でアンケートを取りました。その結果、上大岡のイメージで京急やブルーインの電車にしぼり、主にクレヨンを使って描きました。

「いいところってなあに？」～いろいろあっていいんだよ～

帝京大学教職研究科 客員准教授 浦地啓子

先日、知り合いの校長先生の学校を訪問しました。ちょうど休み時間だったので、数人の低学年と思われる児童が、正門脇にある大きなソテツを指さしながら笑い転がっていました。目をやると、幾本もの青々と伸びた葉の中に白い球が二つ。まるで大きなライオンの顔です。近づいて見ると、使い古されたバレーボールの真ん中に油性ペンで目玉が描かれています。これは校長先生の仕業に違いないとニヤツとしながら来客用の正面玄関のドアを開けると、そこにはウサギを抱いた数人の子どもたちが簀の子の上に座っていました。私の顔を見ると「こんにちは」と笑顔で応答し、そのまま何事もなかったかのようにウサギを撫でています。迎えに出てくれた校長先生は嬉しそうに、「生まれる前からウサギの貰い手が決まっているくらいモテモテなんです。」と教えてくれました。校長室で話をしていると、数人の子が訪ねてきました。校長室の水槽の中の直径 10cm くらいの苔の生えた円く平たい石だと思っていたものは、なんとカエルです。えさをつまんでやると、おもむろに動いてパクリと食べました。校庭では、たくさんの子がドッチボールや鬼ごっこをして遊んでいます。同じ休み時間でも子どもそれぞれにやりたいことが違います。休み時間に、自分の好きなことを安心してできる様々な居場所をさり気なく設けている、この校長先生の学校経営の温かさに触れた気がしました。

昨年、文部科学省の生徒指導の方針である「生徒指導提要」が 12 年ぶりに改訂されました。生徒指導の目的のひとつは、一人一人の「個性の発見とよさや可能性の伸長と社会的資質・能力の発達を支える」ことです。そこにアプローチする視点として、「安全・安心な風土の醸成」が新しく付け加えられました。それは、個性や多様性を認め合い、だれもが安心して授業を受けたり学校生活を送ったりすることができる学校や学級の基盤となる雰囲気を育むことです。風土は、その集団の構成員、学校で言えば、子ども、管理職を含む先生方、保護者、地域等によって知らず知らずのうちに醸し出されるものです。ヒドウン・カリキュラム（隠されたカリキュラム）などと言われるその集団のもっている暗黙のルール等によっても作られていきます。「校訓」や学校の教育目標、子どもの規範である大人の価値観（子ども観・教育観・人間観等）が子どもの言動や考え方に反映され、風土となります。上に挙げた校長先生の学校では、きっと温かな学校風土が作られていることと思います。

学校は、以前から、子どもたちが互いの個性や多様性を認め合うことができる様々な教育活動、例えば運動会や文化祭、宿泊体験行事等を行ってきましたが、今回の「生徒指導提要」では、「ガイダンスプログラム」という授業の中で行う取り組みが注目されています。

それらの中で、特に、互いの個性を認め合うプログラムの例をご紹介しますと、グループの友達のよいところやしてくれたことを発見してカードを送り合う「ホメホメ大作戦」や、自分が欠点だと思っているところを友達が違う見方をしてよいところに変え（リフレーミング）てくれる「欠点も見方を変えればよいところ」等が挙げられます。そのネーミングも面白いですが、小学校の低学年から中高生まで、発達段階に応じた楽しい活動を通し、自分や友達の個性を認め合う経験ができるようにつくられています。

ところが、以前、「ホメホメ大作戦」のプログラムを行ったときに、「Aちゃんにはいいところが見つかりません」という子どもに出会いました。もちろん、いいところを見つけてもらえなかったAちゃんのごことは心配でしたが、友達の「いいところを見つけることができなかつた」Bちゃんのごことはもっと気がかりでした。その子が友達のいいところを発見できなかったのは、学級担任としての私の「いいところ」の基準が一面的であったからかもしれないからです。それからというもの、自分が子どものことを考えるときは、その個性を様々な方向から考えてみることを心がけるようになりました。一度自分が感じたことをリフレーミングしてみるのです。「飽きっぽい子」は、「自分にとってつまらないことを我慢しない自分に正直な子」であり「興味のあることを常に探し続ける好奇心の強い子」です。「真面目で言いつけをよく守る子」は、「自分の考えを封印してまで教師である私にあわせてくれている健気な子」かもしれません。「こだわりの強い子」は、「ものごとを細かく突き詰めて考えられる子」であり、「決めたことは最後までやり通す子」です。「人にやさしく控えめな子」は「人の気持ちを心配して本来の自分を出せずにいる子」なのかもしれません。どの見方がよりその子に迫るものであるのかはわかりませんが、そう考えてみるだけで、自分の子どもへのかかわりの幅が広がる気持ちがします。

また、友達のよいところ（個性を）認めることができるためには、その子自身が自分のよいところ（個性）を大事にできる素地が必要です。私は、授業参観の後の保護者会で、「お子さんのいいところを5つ挙げて、お隣の方と話してください」というグループワークをして、お母さん方にも協力をお願いすることにしました。学校でできなかったことを保護者をお願いするのですから、ちゃっかりしていますよね。でも、保護者の方々には、そのグループワークを通して「普段から叱ってばかりで誉めていなかった」「自分の子どものいいところをたった5つさえ挙げられなかった」「お友達の保護者から言われて我が子のいいところに初めて気づいた」「これからの家庭での子どもへのかかわりを変えて、もっと褒めますね。」とたくさんのお話してくださいました。

人が、子どもや他人を変えることは、容易なことではありません。しかし、見ている私を変えていくことは、できないことではありません。一朝一夕にはいかなくても行きつ戻りつしながらでも少しずつ子どもとのかかわりは変わっていくものではないでしょうか。

※「ガイダンスプログラム」としてここに挙げた例は、

横浜市 HP [子どもの社会的スキル横浜プログラム](http://yokohama.lg.jp) 横浜市 (yokohama.lg.jp)から引用

蒲地 啓子 (かまち けいこ) 帝京大学大学院教職研究科 准教授 公認心理師、学校心理士

横浜市立小学校教員を経て、横浜市教育委員会指導主事、横浜市立小学校長、横浜市教育委員会課長等として、主に不登校児童生徒や発達障害のある子どもたちを支援する横浜市の専門教員である児童支援専任教諭(校内で特別支援教育コーディネーターと児童指導担当を主に担う)の育成にかかわってきました。また、横浜市教育相談センターで不登校問題に、またスクールソーシャルワーカー運用事業にかかわり、様々な角度から子どもたちを支援する仕事に従事してきました。

